

故郷第二場面 読んだ読んだ

三年一組 氏名

明るく日の朝早く、わたしはわが家の表門に立った。屋根には一面に枯れ草のやれ茎が、折からの風になびいて、く「おまえが着くおよその日取りは知らせておいたから、いまに来るかもしれない。」

主人公は、変わり果てた家の姿に、心を痛めることがなかった。母は家の前で主人公を待ち、お金がないこと、辛いこと、引越しのことなど、暗い話題になり、少しでも明るい話題にしてあげられるため、ルントウの話をした。そこから、子ども思いな事が分かる。辛い現実から逃げようとするところは、主人公と母の共通点だった。 さん

主人公は、我が家の表門に立った。枯れ草のやれ茎が、この古い家が持ち主を変えるほかなかった理由を解き明かし顔で言っている。母は年をとって掃除はできないし、主人公はお金がないことに申し訳ない気持ちだったけど、もうあきらめるしかなかった。母は子ども思いで心配をかけないよう、やるせない表情を見せないようにし、引越しの話から離そうとした。だが、とうとう引越しの話になり、主人公は、先にやっていたこと(家を借りたことや物を売ったりしたこと)を母に話し、母は賛成してくれた。そんな暗い話題から、母は明るい話題に変えるために、ルントウの話始めた。 さん

主人公は自宅に帰って、村も家も主人公もあのころとは違う風になってしまっている感じがした。母はやるせない表現が本心で、母は引越したくない気持ちで引越しの金の話とかで暗い感じになっていた。だから、せめてもの明るそうな話であるルントウの話を持ち出したのだろう。ふと思ったのだが、ホルルの前でそんな話ばかりするのもあんまり良くないから話を変えたのかもしれない。 くん

主人公は我が家に帰ってきた。すると表門には母がもう迎えに出ていた。だが、家の屋根を見ると、一面に枯れ草のやれ茎があつたりした。こうなってしまったのは、こういうのを掃除してくれる人を雇うお金も経済的になく、母ももう年齢的に老いているからである。茶を注いでくれたりしてくれた母だが、演技で機嫌のいいように振る舞っていたが、それは隠しきれず、主人公にも本当は引越したくないという気持ちが伝わっていた。それに対して、ゴメンね、申し訳ないと思っていた。家はもう借りた、道具類を半分ほど処分したが良い値にはならなかったなどの暗い話題になっていった。そこで母は、明るい話題に変えようとルントウ(雇い人)の話をしたりした。 くん

主人公は表門に立って、二十年ぶりに帰ってきた自分の家を見つめていた。屋根には枯れ草が放置され、一切手間をかけられていない家を見て、まるで他人事のように思っていた。自宅の庭先まで行くと、子ども思いの母親が迎えに出ていた。二十年ぶりに帰ってきた息子への気遣いの気持ちが表れていて、主人公を座らせ、休ませ、お茶を注いでくれるなどしてくれた。なかなか引越しの話ができなかったが、とうとう引越しの話になった。もうすぐ出なければならぬ家の話や、お金の話など、二十年ぶりに帰ってきた親子の会話ではないような暗い話になった。けれど、その暗い話や暗い空気が気まずくて、母親が話題を変えた。三十年も会っていないルントウの話だ。明るい話題に変えようと思ったが、何十年も会っていない息子との共通の会話が、雇い人のルントウの話だった。 さん

